

シドニーオリンピック水球競技についての分析

坂田 勇夫

Report of water polo games in the Sydney Olympic

Isao Sakata

1, はじめに

シドニーオリンピックは、20世紀最後のビッグなスポーツイベントということもあって、直接現地について観戦したいという気持ちが強かった。特に、オーストラリアへはすでに4回（海外遠征で3回、スイミングクラブ視察で1回）訪れたこともあり、親近感があり、気安くいける国であったからである。

一般的にオリンピックにおけるテレビ放映は、日本選手が出場している、しかもその種目が活躍している競技（水泳競技、陸上競技、サッカー、ソフトボール、野球、柔道、シンクロ等）に限られる。そのような実情から判断すると、水球競技^(*)は放映されないわけで、シドニーで連日繰り広げられる水球の醍醐味である水中コンタクトプレーの熱き戦いは我々水球熱狂者には全く届かないことは明白であった。

オリンピック観戦をつのらせたもう一つの理由は、スペインチームを応援したかったことである。スペインは、アトランタオリンピックで初優勝し（地元バルセロナオリンピックでは惜しくも2位）、その2年後の世界選手権（オーストラリア パース開催）で優勝している世界のトップチームである。筑波大学水球チームとスペインとは17年前から水球を

通した友好交流を継続してきた。特に、スペインのナショナルヘッドコーチであるジャネー氏は交流の最初からかかわってくれた友人であり、プレーヤーのチキ サンツ、グスタボは過去に1度、筑波に招待した友人であり、チャバ、ヘスス等の主力選手達はこれまでの交流で、我々のため世話してくれた選手仲間である。

男子水球競技は9月23日～27日に予選リーグ、9月29日～10月1日に順位決定リーグ（5～8位、9～12位決定戦、5～8位決定戦）、準々決勝、準決勝、3位決定戦、決勝戦という日程であった。体育の授業が休講にならないように考慮して、9月27日の夜行便を利用して9月29、30日、10月1日の3日間、ゲームを観戦することに落ち着いた。

2, シドニーオリンピック水球競技分析

1) 予選リーグにおける戦略

水球競技は、A, B グループそれぞれに6チームずつ配分されて、リーグ戦を行う方式で、その結果は表-1に示す通りであった。

予選リーグの見どころは、AB各グループで4位以内を獲得するかどうかであった。4位以内になると上位入賞の可能性が高まるが、5位以降だと順位が9位以下になることから、4位以内になることがまず重要な分岐点にな

るわけである。

しかし、4位以内になればそれでよいというわけではなかった。ベスト4へ進出するには、A1位-B4位、A2位-B3位、A3位-B2位、A4位-B1位というAとBの順位によってたすきがけで対戦する方法がとられるため、自グループのなかでどの順位になるかを確かめながら、対戦するチームを正確に予測して、予選リーグを戦う必要があった。

例えば、スペインについてみれば、表-1に示すように、Aグループで3位であるためBグループ2位のクロアチアとの対戦となった。クロアチアにはアトランタオリンピック

や世界選手権で最終的に勝利を収めているので、ユーゴスラビアあるいはハンガリーと対戦するより、戦い易い相手であったと推察される。

結局、スペインはクロアチアと、地元のオーストラリアはユーゴスラビア、イタリアはハンガリー、アメリカはロシアとの対戦になった。

スペインはクロアチアと対戦し、予想通りベスト4進出を果たしたわけである。

以上のことから、予選リーグで4位以内を確保し、さらには、準々決勝で対戦する相手を予測した順位を獲得することが重要な戦略

表-1 予選リーグ順位

グループ	順位	国名	勝敗	グループ	順位	国名	勝敗
A	1	ロシア	4勝1敗	B	1	ユーゴスラビア	4勝1敗
	2	イタリア	4勝2敗		2	クロアチア	4勝1敗
	3	スペイン	2勝2敗1分		3	ハンガリー	3勝2敗
	4	オーストラリア	1勝2敗2分		4	アメリカ	2勝3敗
	5	カザフスタン	1勝3敗1分		5	オランダ	1勝4敗
	6	スロバキア	0勝5敗		6	ギリシャ	0勝5敗

表-2 順位決定リーグ～決勝戦の結果

1) 9～12位リーグ					
ギリシャ	6-6	カザフスタン	オランダ	9-8	スロバキア
カザフ	11-8	スロバキア	ギリシャ	6-6	オランダ
ギリシャ	12-8	スロバキア	カザフ	6-4	オランダ
2) 準々決勝					
ロシア	11-10	アメリカ	ハンガリー	8-5	イタリア
スペイン	9-8	クロアチア	ユーゴ	7-3	オーストラリア
3) 5～8位決定戦					
アメリカ	9-8	クロアチア	イタリア	8-4	オーストラリア
4) 7～8位決定戦					
クロアチア	10-8	オーストラリア	5) 5～6位決定戦		
			イタリア	10-8	アメリカ
6) 準決勝					
ハンガリー	8-7	ユーゴ	ロシア	8-7	スペイン
7) 3位決定戦					
ユーゴ	8-3	スペイン	8) 決勝		
			ハンガリー	13-6	ロシア

であるということになる。

2) 僅かな得点差状況で勝利する実力の重要性

表-2 に示す通り、9～12位決定リーグ、5～8位決定リーグ、準々決勝、7～8位決定戦、5～6位決定戦、準決勝の各ゲームは、順位決定にかかわる非常に重要なゲームである。これらのゲームについての得点差の状況を見ると、1点差以内が16ゲーム中9ゲームで56.3%が、2点差以内は16ゲーム中11ゲームで68.8%の出現率であった。すなわち、1点差のゲームは半数強、2点差のゲームは70%弱出現することが示唆された。

表-3 は、2000年度に行われた日本の主要なトップの4大会（日本高校選手権、国民体育大会、日本学生選手権、日本選手権）と国際的な主要な2大会（1999年のFina Cup、シドニーオリンピック）について示している。

Fina Cupでは、1点差が40%、2点差以内が60%で、日本の大学以上の大会では、1点差で43.8%、2点差以内で56.3%で、シドニ

ーオリンピックの出現率に比べると低い傾向を示している。しかし、日本の高校生大会では、1点差が37.5%、2点差以内で45.8%で、世界のトップゲームにくらべると、かなり低い値を示している。

シドニーオリンピックが如何に厳しい得点差の状況で戦われていたか理解することができる。すなわち、オリンピックにおける戦いは、僅差なリードを保ち、ミスによる失点を少なくし、如何にして相手に1点差を保って勝利することができるかが重要なポイントであるということを示唆している。

3) 金メダルへの執念の戦いである準決勝

(ハンガリー 8-7 ユーゴスラビア)、
(ロシア 8-7 スペイン)

何といても準決勝は、決勝に進むかどうか、すなわち金メダル獲得に執念を燃やすかが問われる試合である。そのことを実証するように、両試合とも実力伯仲のデッドヒートとなった。会場は、選手、観客、役員等が一体となって盛り上がり、白熱したゲームに酔

表-3 2000年度主要水球競技会における得点差 (但し Fina Cup は1999年度)
(数値はゲーム出現数、試合数合計はベスト8以降の試合数)

	インハイ	国体	高校計	インカレ	ジャパン	日本総計	Fina	シドニー	外国計	総計
5点差以上	3	4	7	3	3	13	3	2	5	18
4点差以内	5	12	17	5	5	27	17	10	27	54
3点差以内	3	10	13	4	5	22	14	8	22	44
2点差以内	2	9	11	4	5	20	12	7	19	39
1点差以内	2	7	9	3	4	16	8	5	13	29
試合数合計	8	16	24	8	8	40	20	12	32	72

- ・インハイは日本高等学校水泳競技大会水球競技のことで、全国8ブロックの予選を勝ち抜いた高校単独チームによる競技。競技はすべてトーナメント方式である。(ベスト8以降の試合数は8)
- ・国体は国民体育大会の略称で、全国8ブロックの予選を勝ち抜いた各都道府県を代表する高校生選抜チームによる競技。代表の16チームがA、Bグループに分かれる。1回戦で勝ち残ったAB各々4チームのリーグ戦で順位を決めた後、1～4位同じ順位同士によって最終順位を決める方式である。(ベスト8以降の試合数は16)
- ・インカレは、日本学生選手権水泳競技大会水球競技のことで、全国3ブロックで予選を行い、勝ち抜いた大学チームによる競技。競技方式は、インハイと同じ。
- ・ジャパンは日本選手権水泳競技大会水球競技のことである。
- ・シドニーは、シドニーオリンピック大会のこと。

いしれていた。筆者も緊迫感を痛感しながら、1プレー、1プレーに一喜一憂し、大きな感動を得ながら、水球の醍醐味を享受したわけである。

特に、ロシアスペイン戦は死闘にも喩えられる延長戦が繰り広げられた。それでも決着がつかず、引き続いて、サドンデスによる戦いが10分間にわたって必死の攻防が続いた。最終的には、スペインのプレーヤーの1人がエクスクルージョンファウル^(*)を犯したことで、ロシアはそのチャンスを活かして得点しやっとのことで終結した。

選手・監督等の精神力・体力、気力、わざ、戦術などを余すことなく駆使して戦ったすごさに驚嘆するのみであった。シドニーに来たからこそこのような凄いゲームに酔いしれることができたわけである。やはり世界の檜舞台は、直接観戦すべきといえる。

4) 冷静さの重要性を感じた準決勝

筆者の観戦したすべての試合を通して、レフェリーは水球競技役員^(*)の職務規定である「担当試合を完全に統括する」を厳しく遵守していたという印象が非常に強かった。

熱戦が繰り広げられればそれだけ、監督・コーチ・選手達の感情的ボルテージは上がるわけであるが、監督・コーチ・選手は常に冷静なゲーム運びをすることが非常に大切であるということが再認識できた。

監督はベンチから立ち上がってアドバイスのためプールサイドをルールが規定する範囲内は動けるが、規定の4mラインを乗り越えてセンターライン方向に進めば注意を受け、さらにくり返すとイエローカードが提示され、つぎの反則行為でレッドカードが出示されてベンチから排除される。スペインの監督はレッドカードで退場となり、重要な試合の大部分指揮がとれなかった。選手についていえば、レフェリーの判定に不服従の態度を示すと即刻、エクスクルージョンファウルと判定され退水が発生し、自チームに不利な情勢を招来

することになる。以上のことから、冷静なプレーが如何に大切かを再認識した。

5) 基本的セオリーの遵守で金メダルのハンガリー (ハンガリー 13-6 ロシア)

ハンガリーのすばらしくてすごいシュートの数々はロシアから13点もの大量点を奪取し、守りでは鉄壁のゴールキーパーのシュートセーブとチームディフェンスに支えられて失点は6点であった。実力伯仲の決勝戦を期待していただけに、この得点差に期待は完全に裏切られた。しかし内容としては、勝つために必要な基本的セオリー(得点獲得と相手得点阻止)が完全に遂行された模範的ゲームであった。

(1) ゴールキーパーの非凡なシュート阻止能力

猛攻ではじまったロシアの速攻は第1ピリオドの序盤に3回訪れた。ロシアの速攻は1人が完全にノーマーク状態という絶好の得点チャンスでのシュートであったにもかかわらず、孰れもハンガリーのゴールキーパーに阻止された。これらの内の1本或いは2本決まっていたらこのゲームはどうなっていたかわからない。それほど、ゴールキーパーのシュート阻止能力のすごさはチームにリズムを与え、勝利に大きく結びつく。

(2) 決めるべく時にチャンスをつくり、必ず得点する能力

ハンガリーは相手速攻攻撃の猛攻を凌いだ直後、ロシアの選手のエクスクルージョンファウルによってチャンスを得た。「相手チャンスのあとのチャンス」である。正味20秒間は6人対5人(退水時攻撃)となり、得点チャンスを迎えた。

ハンガリーは、パスまわして相手を一方に寄せ、左から大きくパスを右側へまわして右側に位置した左利きの選手が右コーナーにバウンドシュートを決めた。

ロシアに同点にされた直後、今度は右サ

イドに位置した左利きの選手がロシアのディフェンスのハンドアップをかわしてミドルシュートを決め、さらに、1ピリオド終了間際にロシア選手が7m以上離れた地点でオーディナリーファールを犯した。次の瞬間ハンガリーの選手は直ちに7mシュート^(※注3)をバックハンドで放ち、もの見事に決めた。このシュートはまさに意表をつくもので、観客はもとより選手達の誰もが予想しない投げ方で、さらに、そのシュートコースはゴールの隅に吸い込まれるという信じられないスキルフルなものだった。その時点でハンガリーは3-1とリードしてしまった。

(3) 連続得点するゲーム運びの重要性

2ピリオドはハンガリーの多彩なシュートによる連続追加点でこの試合は決定した。ロシアに1点追い付かれ4-2になった後、ハンガリーは速攻からのシュートで、続いてミドルシュートで、さらにフローターが動いて外周からパスを受けてシュートで、そしてメジャーファウルを奪取して退水時攻撃という波状攻撃で連続得点して、8-2と大量のリードとなった。ロシアは戦う気力が完全失ってしまったといっても過言ではない。

連続得点は勝利への重要なポイントであるという証明である。

(4) ディフェンスの制空権を凌駕しての得点

ハンガリーの右45度のシューターがその前に立ちただかるロシアのディフェンスの片手ハンドアップをものともせず、上半身を完全に浮き上がらせて、そのディフェンスの手先の上を抜いて、ゴールの右隅に見事に得点したプレーは圧巻だった。

ほとんどのシュートコースは、ゴールキーパーとディフェンスが協力して守るわけであるが、ゴールの両端のコースはディフェンスが片手又は両手を上げて守る。

このシューターは、バレーボール競技でアタックする選手がブロックの手の上を抜いてアタックをきめることと同じプレーに相当するが、ディフェンスが守っているそのコースを、片手のはるか上から抜いてのシュートは、豪快極まるものであった。

(5) ディフェンスを瞬時に真横にかわしてシュートできる能力

ハンドアップしているディフェンスの脇下、頭の上、横を抜いてのシュートも痛快そのものであるが、相手ディフェンスをシュートフェイクで釘付けにし、ほんのわずかな瞬間にディフェンスを完全にかわして、上体を真横に横たえながら左サイドにボールを構えながら、右隅方向に正確でタイミングよいスピードあるシュートを放ち、得点に結び付けていた。シューターはディフェンスを如何にかわして、ゴールキーパーの守るコースをかわして決めるか、あるいは、阻止できぬくいコースにスピードある正確なシュートが打てるどうか重要であることを痛感した。

(6) クイックモーションシュートの威力

ハンガリーは外周でボールをまわし、ゴールキーパーやディフェンスのハンドアップを窺いながら機をみて、パスを受けてからクイックモーションでシュートを放ち、ゴールキーパーの肩口、側頭部の耳をそぐコースあるいは、手の届き難いコースを抜くシュートは威力があった。世界のトップチームであるロシアのゴールキーパーも、パス回しとクイックモーションによるシュートにはついていけず、ボールはゴールキーパーのシュート阻止反応が起こる前にゴールネットを突き刺していた。

ハンガリーが放つシュートタイミングのすばらしさに唯々感心するばかりであった。

3. まとめにかえて

今回のシドニーオリンピックの水球競技を

観戦して多くのことを学ぶことができた。

- 1, 予選リーグにおける順位をめぐる戦略は、メダル獲得への分岐点・前哨戦である。
- 2, 僅差の得点差を制する術が、シドニーオリンピックのゲームには要求されていた。
- 3, 準決勝は、金メダル獲得への執念が激突する激しい戦いであった。
- 4, 戦いがフィーバーすればする程、監督・コーチ・選手は平常心（冷静なプレー）に徹すべきである。
- 5, 優勝したハンガリーは、守りと攻めのバランスが卓抜であった。

特にゴールキーパーの得点阻止力と攻撃陣の多彩な得点能力（得点チャンスに確実に得点すること）が存分に発揮できたことが優勝に直結した。

今回のオリンピックで水球競技を観戦することができたことは、高橋伍郎体育センター長はじめ、荒井宏和準研究員、水泳受講学生、その他多くの方々のご協力があったからである。最後に、こころから謝意を表したい。

※注1 水球競技は、水中で行うボールゲームで、7人ずつ（内ゴールキーパー1人）のプレーヤーが、30m×20mの広さで水深2m以上のフィールドの中で、全員攻撃・全員防御の攻防を繰り返しながら、相手ゴール（ゴール 横3m×高さ90cm）にボール（サッカーボールくらいの大きさ）を投げ入れて得点を争う競技である。控え選手6人がベンチに座り、随時交代できる。

主なルールとしては、ボールを保有して35秒以内にシュートできないとオーバータイムとなり、相手チームへ攻撃権は移る。（アウトオブバウンズ、エクスクルージョンファウルが発生すると攻撃権は0秒からカウントされる。）

また、ボールを保持した選手を沈めるなどの身体的コンタクトプレーは許されるが、ボールを保持しない選手への動作妨害は反則となる。軽いファウル（オーディナリーファウル）にはフリースローが、重いファウル（エクスクルージョンファウル）には退水が与えられる。

※注2 エクスクルージョンファウル——エクスクルージョンファウルは、フリースロー妨害、相手の顔に水を跳ねかける、ボールを保持していない競技者を捕らえ、沈め、引き戻す、故意に相手競技者を蹴り、あるいは殴り等不適当な動作をする、不行跡（好ましくない言葉や乱暴なプレーやファウルプレーへの固執等）を犯した場合、相手チームにフリースローが与えられ、反則を犯した競技者は退水となる。退水は、正味20秒間経過するか、得点がなされた時か退水をとられたチームがボールを保有した直後にレフェリーが再入水の合図すると、規則にしたがって再入水地域から入水できる。

エクスクルージョンファウルかベナルティファウルを合わせて3回犯すと永久退水になり、その試合の残りのピリオド・時間はフィールドでプレーできない。

※注3 7Mシュート——7mライン外側で犯された反則でフリースローを与えられたチームの競技者が7mライン外側から直ちにシュートできる。オーディナリーファウル地点が7m以内であれば、シュートは認めらず、フリースローを行うのみである。